

上林曉全集 五

筑摩書房

上林曉全集 五

昭和四十一年七月十日第一刷發行

著 者 上 林 曉

發行者 竹之内 靜雄

發行所 筑 摩 書 房

東京都千代田區神田小川町二ノ八

電話東京 〇七六五一（代表）
振替 東京 四 一 二 三

印刷 多田印刷株式會社
製本 矢島製本株式會社

上林曉全集第五卷目次

めぐりあひ	三
山羊供養	一六
夏曆	二九
閉關記	六
彷徨者	八六
友樹と高樹	九
年少の友	一四
競争者	一六
孤獨先生	一七
北國	一九

山峽一夜	二〇八
風致區	三〇
嶺光書房	三三
風船競走	三五
きやうだい夫婦	三六
晚春日記	二八二
現世圖繪	三〇一
四國路	三三一
遅櫻	三四六
縞帳	三六二

聖ヨハネ病院にて……………三八一

母堂……………四六

書誌……………四九

小說
五

めぐりあひ

「あの、町會の事務所にゐた肥つた女の人ね、僕はあの人を随分古くから知つてゐるんだよ。」
或る晩、夕食のあとで、世間話の序に隈元は妻に言つた。

「鳴井さんて言ふ方でせう？」

「さア、名前は何んと言ふか知らないんだけど。」

「あの方の旦那さんは、應召してゐるんですつて。」

「それで、町會へ勤めはじめたんだな。」

「とても頭が好いらしく、事務なんかもてきぱき切り廻してゐるわ。」

「もう十四五年になるかな、その時分、あの人はお母さんと二人で本郷にゐたんでね、それで知つてゐるんだ。」

「どうして、知つてゐるの？」

「どうしてつて……。知つてゐると言つても、僕はあの人を知つてゐるんだけど、あの方は僕を知らないかも知れない。そんな知り方なんだがね。」

限元は言葉を躲した。妻には思はせぶりに聞えさうだつたし、悪くすると、怪しまれさうな危険さへ感じないではなかつたが、限元はまともに、どうしてあの女の人を知つてゐるのか、言ひたくなかつた。言つたつて、極く詰まらないことなので、自分が困ることはちつともないんだし、言へば、ちゃんとしたお嘶にもなるのだから、實は言ひたくてうずうずしたのだけれど我慢をして言はないことにした。言ふことは結局、あの女の前身を明かすことになるので、彼女の名譽と言つたものを考へた場合、言はないでおいた方がよいと思はれたのだ。そこで限元は、話を別の方に持つて行つた。

「娘の時分にはす、つとした女だつたが、今はすっかり脂肪肥りしてるやうだね。」

「でも、顔でも言葉でも、すつきりしてゐて品があると思ふわ。」

「あの人のお母さんも、この間も途で見かけたんだが、なかなか品のある人だよ。」

「さう聞けば、なんだか由緒のありさうな人達に思はれるわね。」

そこで限元は、あの人の家は、もとは相當な實業家だつたさうだと言はうとしたが、それも言はないことにした。あまり深入りしてゐると、彼女の前身を明かしさうな誘惑に驅られるからであつた。一番好いことは、もうこれ以上あの女の噂はしないことだと思つたので、限元はそれつきり口を噤んでしまつた。

彼女は、本郷の或る路地裏で、母親と二人で、おでん屋を営んでゐた。其處で限元は彼女を知つたのだ。その路地のずつと先の方には、元一高の炊事場の煙突が聳えてゐた。店の名は「姉妹の家」と言つた。母一人に娘一人、親子が心を寄せ合つた氣持を、姉妹になぞらへたのであつたらう。

限元が、家族の前に明かしたくて明かしたくなかつたのは、そのことであつた。明かしたつて構はないのだけれど、彼女が本郷でおでん屋を営んでゐたと言へば、好い噂の種にして、妻は隣組の奥さん連に流布しないとも限らないし、子供は子供で、界限の遊び仲間にあれ歩かないとも限らない。彼女が目立つ所で目立

つ存在として活動してゐるだけに、そんな噂がひろまつたり彼女の耳に入つたりしては、心無きわざと言ふほかはない。さう思つたものだから隈元は、妻に向つてさへ黙つてゐることにしたのだ。彼さへ黙つてゐれば、彼女にゆかりのない郊外町で、彼女の前身など考へてみる者は一人もないはずだ。

「姉妹の家」は普請が新しく、天井も高く、明るくさっぱりとしてゐた。その明るくさっぱりとしてゐるところが、「姉妹の家」を如何にも素人おでん屋らしく見せてゐた。彼女はその店で、母に代つたり母に加勢したりしながら、湯氣の立つ銅鍋の前に立ち、長い竹箸を持つておでんを捌いてゐた。焼竹輪などだと、隈元はがつぶり食ひつきたいのだが、この店では庖丁の刃を入れてゐて、彼女はそれをたどたどしい手附きでするのでした。彼女は勘定などのことで判らないことがあると、甘えたやうな、頼り切つたやうな聲で、「おかあさん」と座敷にゐる母を呼んでは、助けて貰つてゐた。彼女はその頃二十そこそこで、長い髪をお下げにしたりしてゐた。

母親は、如何にも母親を感じさせる人で、隈元などもどうかした拍子にふつと故郷の母を思ひ出し、甘えてみたいやうな氣持を唆られることがあつた。彼は或る時酒に酔つた勢ひで、僕の母も丁度小母さんくらゐの年配ですよと話しかけ、十六で嫁に来て、十七で僕を産んだんですなどと、いらぬことを饒舌つて、あとで後悔したことがあつた。其處には、場所柄、大學關係の若い人や大學生などがよく來てゐたが、彼等も同じ氣持らしく、いつか盛んに母といふものについて論じ合つてゐたことがあつた。「姉妹の家」の母親は微笑みながらそれを聞いてゐた。

誰からともなく聞いたところによると、この母親は、或る相當な實業家の未亡人であるといふことであつたが、母親から娘に傳はる生れの好さは、争へなかつた。彼女等親子には、下品さや卑しさは微塵も感じられなかつた。總てが品良く、隈元の妻が言つた如く、由緒ありげな人達に見えた。或る時、彼女達の事情を

知つてゐるらしいお客が、毎朝早くから魚河岸までおでんの種を仕入れに行くのは大變でせうと同情すると、「でももう慣れちゃいましたわ」と母親は笑ひに紛らしたたが、寂しげな影は隠すことが出来なかつた。魚河岸までおでんの種を仕入れに行くといふことだけでも、世の荒波に揉まれることであるから、時によれば、母親の顔にはきつさが萌さないではなかつたが、娘は母親を防波堤として、静かな灣の中にいつまでもおつとりとしてゐるといふ風で、彼女が長い箸でおでんを捌いてゐるところは、お嬢様の手慰みと言つた感じが抜けなかつた。

隈元はその頃駒込に住んで勤めに出てゐたので、勤めの歸りには、時々「姉妹の家」に寄つて酒を飲み、おでん茶飯を食つて來るのであつた。一人で詰らない時には、程近くの下宿屋でくすぶつてゐた友人の幸田佳吉を引つ張り出して來たこともあつた。幸田は隈元と同じ釜の飯を食つてゐた仲だが、一足先に足を洗つて、作家として立たうとしてゐた。彼等は蓴菜の酢に浸したのを、まゝに酒を飲みながら文學の話に熱中した。「姉妹の家」では蓴菜が賣り物であつた。今でも隈元は、蓴菜と言へば「姉妹の家」を思ひ出し、「姉妹の家」と言へば蓴菜を思ひ出すのである。箸で挟むとつるりととるものを、口に入れてポキリと噛むのであつたが、隈元はそんなものを食ふのは初めてだつたから、これは何かと幸田に尋ねてみた。

「さうか、初めて食ふのか。これは蓴菜と言ふもんだよ。僕は今丁度、村の子供達が沼へ蓴菜を探りに行くところを書いてゐるんだ。」と、北の國に生れた幸田は答へたが、それから半年ならずして、その、沼へ蓴菜を探りに行く村の子供達の生活を描いた作品を以て、幸田は新進作家として盛名を謳はれることとなつたのであつた。

隈元はまたその頃、學生時代の友人達と同人雑誌を出してゐて、その仲間達とも一緒に「姉妹の家」へ行つたことがあつた。その友人達は、若い女の畫家達と知合ひだつたので、その女流畫家達を誘つて行つたこ

ともあつた。彼女等の中には、一杯二杯の酒だつたら盃を乾す者もあつた。そんなことから、仲間の一人は、女流畫家の一人と結婚することになつて、長い間世帯を持つてゐたのだが、遂に破局の日が來て別れて了つてからでも、かれこれ數年になるのである。

そんなことを思ふにつけ、隈元が「姉妹の家」へ行つてゐたのは、もう遠い昔のことで、それから今日までの間には、十年に餘る歳月が経ち、實に様々のことが介在してゐるので、記憶の外のことのやうな氣さへするのである。事實「姉妹の家」のことなど、完全にと言つていくらゐ記憶の外に沈んでしまつてゐたのに、今になつて、どうした因縁なのか、所もあらうに、つい目と鼻の間の町會事務所に働く鳴川さんとして、朝晩「姉妹の家」の娘を見ることになつたのである。考へてみると、彼の屬する天神町會事務所に働く鳴川さんといふ人と本郷の「姉妹の家」の娘とが同一人であることが不思議な氣がしないではない。しかし二つの影像を重ねてみると、それは勿論びつたりと重なるのである。

隈元は駒込を去ると、今住む郊外私鐵の沿線に越して來て、丁度十年になる。或る日散歩に出てゐた彼は灯點し頃になつて歸つて來た。近所の酒屋の前まで來ると、彼は思はず「おやッ」と驚いて立ち停つた。酒屋の店先に、明るい灯を受けて立つてゐる母と娘の姿が眼に入つたのだ。彼は一步退つて、二人を見直した。母は娘の肩の高さで、二人仲好く並んでゐる姿は、「姉妹の家」の親子に間違ひはなかつた。夏だつたから、彼女達は浴衣を着てゐた。彼女達の顔は眩しいほど明るかつたが、それに引き代へ、背姿は黒いほど暗かつた。この黒い影繪を見ただけで、「姉妹の家」の親子であることは最早疑ふことが出来なかつた。

「あの、今日この御近所へ越して來たばかりなんですが、お醬油やお味噌なんかお届け願へますか知ら。」などと言つてゐる母親の聲にも聞き覚えがあつた。娘は母の方に肩を摺り寄せて、店内に並んだ日用品を物色しながら、相談を持ちかけてゐるらしい様子であつた。

これはもう五六年前の、或る夏の晩のことであつたが、「姉妹の家」の母と娘はかうして再び隈元の眼の前に姿を現はしたのであつた。「姉妹の家」のことなどもう忘れ果ててゐた時だつたので全く思ひがけぬ出現であり、思ひがけぬ邂逅であるやうな氣がした。彼は「姉妹の家」の母子を懐しがるといふよりも、その當時の自分の生活を懐しがるために、この突然のめぐりあひを思ふと、心のときめきのやうなものを感ずるのだつた。

あの酒屋に現はれて、あんな風に言つてゐたのだから、何れはこの近所に越して來てゐるのであらうと思ひ、散歩の折など、それとなく氣を付けてゐたが、隈元は「姉妹の家」の親子の居所を突き止めることが出來ないであつた。二人並んで魚屋の店先に立つてゐるのを見かけたこともあれば、二人揃つて、お風呂屋から出て來るのを見かけたこともあつた。彼が見かける度に、二人肩を並べてゐないことは滅多になかつた。

或る薄い霧のかかつた晩に、隈元は尼寺の裏手の杉森の裾を通つて、驛の方へ散歩に出てゐた。その時、三人連れの人影が、左手の路地口から出て來て、彼の鼻先を歩いて行くのだつた。先に立つたのは、中折を冠つた若い男で、後から並んで行くのは、紛れもなく「姉妹の家」の母と娘だつた。背の高さの釣合ひと言ひ肩の姿と言ひ、霧の中でも、二人であることは直ぐそれと知れるのだつた。

彼等は、森の際の殘置燈の下まで行くと、そこに立ち止つた。三人の顔が、殘置燈の光に青白く照らされてゐるのから眼を外らしながら、隈元は通り過ぎた。

「ぢやア、お母さん、左様なら。」と娘が助るやうに言つた。

「左様なら。」と男は娘に並んで、帽子を取つた。

「ぢやア、お氣を附けてねえ。」と、母親は二人の後を見送りながら立つてゐた。

家並の間の暗い道に入るところで、娘達は後を振り返りながら、もう一遍「お母さん左様なら」と別れを

惜しみ、それから若い者同士肩を並べ、睦じげに語つて行くのであつた。

「左様なら。」と母親はそれに應へ、二人の影が闇に消えるのを見澄してから、一人歸つて行く様子であつた。

それはどんな事情の場面であつたか勿論知る由もない。ただ隈元に判つたことは、母親がこの世の頼りにして生きて來た娘が、母親の手を離れて、夫である男の手に委ねられてゐるといふことであつた。娘は母の許を去つて、どこか旅へでも行くものか、或は若い夫婦だけの住居へ歸つて行くものかと思はれた。心なしか、二人を見送る母親は、一人取残されて、姿も聲も淋しさうであつた。

その後隈元は、途の上で「姉妹の家」の人達に度々遇つた。それで見ると、娘は依然として母の許に居るらしく、夕方の人波の中に交つて、勤めの退けらしい姿で、驛の方から歸つて來るのが見受けられたりした。母親は子供をおんぶして、そこらをよく歩いてゐた。それを見ると隈元は舐養子を迎へ、子供まで成して、と穿つたことを考へ、「姉妹の家」の人達の生活も、既にそこまで行つてゐるのかと、感慨深く頷くのであつた。

娘は隈元に出會つても、全然見知らないらしく、舊知らしい素振りは少しも見えなかつた。十年餘りも昔に「姉妹の家」に出入りした客など、一々覚えてゐるはずはないのだ。だから隈元は、娘と會つても、素知らぬ顔して行き過ぎることが出來た。しかし、母親の場合は、そんな風に氣樂にいかなかつた。母親は隈元の顔を見知つてゐるやうな氣がしてならなかつた。隈元に會ふ度に、母親の顔には、舊知を示すかすかな表情が動いて、目元口元で話しかけて來るとしか思はれないのだつた。時には、その物言ひたげな顔に誘はれて、隈元は今にも口を切らんばかりになりながら、つい言ひそびれ、そのまま擦れ違つて行くこともあつた。出會ふ度にそんな風で、物も言はずに顔を反向けて行くのが段々氣詰りになつて來たので、隈元は或る日例

の杉森の蔭に立つて子守をしてゐる母親を見附けると、不躰けとは思ひながら、つかつかと側へ寄つて行つた。

「あの失禮ですが、小母さんは本郷にゐらつしやつたことはございませんか。」

「ええ、ゐました。」

「僕は時々お邪魔したことがありましたよ。」

「あ、左様でいらつしやいますか。失禮でございますが、どなた様と仰言るんでございませうか。」

「いいえ、名前を言つても御存じないと思ひますが。」隈元は自分の名を名乗つても始まらないと思つただ。

「このお近くでいらつしやるんですか。」

「ええ、この近所にゐます。」

隈元は、内心拍子抜けの感じで、母親の側を離れた。面と面と向ひ合ひながら、母親の顔にも言葉にも、舊知を示す表情は少しも見えなかつたのだ。してみると、目元口元で話しかけて来るやうに思はれたのは、隈元の僻目だつたのだらうか。それとも、母親は知つてゐて、白ばつくれたのであらうか。隈元はそんな風に考へてみて、結局母親も娘と同様、隈元の顔など少しも覺えてはゐなかつたんだと思はざるを得なかつた。そんなことなら、言はなくてもいいことを言つてしまつたと、隈元は刺立たしい後悔を感じながら歸つて來た。

それから後は、途で出會ふ度に、隈元と母親とはお辭儀を交はすやうになつた。それはよかつたが、或る日隈元が臺所に立つて、何氣なしに硝子戸の外を見ると、子供をおんぶした母親が酒屋からの歸りらしく、醬油瓶を提げて、隈元の家を覗き込んでゐるのだつた。隈元はそれを見ると、恥しさに身の縮まる